授業内における「共同体」の役割：
対面授業とオンライン授業

薦田奈美
三重大学特任講師
komoda@human.mie-u.ac.jp

要旨：本稿の目的は、学生の観点での「質の良い授業」を行うために、対面授業・オンライン授業のさまざまな授業方法をどのように選択すべきかを模索することにある。特に、授業を構成する「共同体」としての教員と学生が、授業内でどのような役割を果たしているかについて、コミュニケーションの観点から各授業方法の違いを検討する。大学で実施されている初修外国語としてのドイツ語学習者を対象としたアンケートの調査を通して、対面授業の代替としてだけではないオンライン授業の可能性を探るとともに、初修外国語授業に関して、従来の対面授業も含めての新しい授業スタイルを提案する。

キーワード：オンライン授業、第二外国語教育、非言語コミュニケーション

1. はじめに

2020 年度から、様々な教育機関においてオンライン授業の導入が行われた。特に大学では、2020 年度の上半期はオンラインツールを活用した在宅学習が徹底された。後期に入り、各種のオンライン授業方法 (オンデマンド配信型 ((資料提示型・動画配信型))・リアルタイム配信型) に加え、従来同様の対面授業と、リアルタイム配信を組み合わせたハイブリッド型授業など、様々な方法によって授業が実施されるようになり、これを引き継ぐ形で 2021 年度の授業も継続されている。授業方法の選択は、大枠で大学の方針により決定されるものの、授業担当者にその方法の選択が任されることもある。本稿では、大学で実施されたオンライン授業に関する学生アンケート、および独自アンケートの結果について考察し、授業を構成する共同体の役割の違いから、学生が捉える「授業の質」の本質を明らかにしたうえで、授業内容と授業実施方法の適合性を考える。これにより、アフターコロナにおいても、従来の対面授業の代替ではなく、オンライン授業と対面授業の適切な活用を通じた「質の良い授業」の展開に役立てることを目的とする。

© 2021 Nami Komoda. All Rights Reserved.

学生アンケートの分析の軸とするのは、「共同体」の役割である。「共同体」という概念は、学習環境を構成する要素として多用され、一般に、学習環境は空間、共同体、人工物、活動から構成されると言われる(山内 2020)。授業という環境の中には、それを構成する共同体として、指導を行う教員と、活動を共に行う、受講している他の学生が存在する。共同体以外のいずれの要素にも、オンライン授業という環境下においては、多かれ少なかれ、対面授業とはなんらかの違いが現れることが予想されるが、本稿では、この「共同体」という要素がどのように授業に関わっているかという観点から、学生が考える「授業の質」と授業方法の連関性を明らかにすることを試みる。

2. 学生アンケート結果

2.1 大学実施アンケート

大学においての授業改善を目的とした学生アンケート調査はこれまでにも実施されてきたが、オンライン授業の初めてともいえるほどの規模の一括導入に際し、様々な大学では、オンライン授業の問題把握とその対応のために調査が行われた。この結果は、大学によりホームページ上で公開されている。本稿では、実施されたアンケート結果がホームページ上に公開されている大学から、無作為に 4 つの大学を選び、比較・検討を行う。[1] 主な調査項目は、現在実施されているオンライン授業に対する満足度・理解度・学習効果等であり、対面授業とオンライン授業のそれぞれの方法について、学生が「授業の質」についてどのように捉えているか、全体的な傾向を把握する。

まず、4 大学に共通する質問項目に、オンライン授業の利点と改善点がある (図 1 、図 2)。「良いと思う点」「改善すべき点」について、約 10 項目の中からの複数選択式である。項目数や項目内容はもちろん完全に一致はしていないものの、その内容は概ね一致している。

[1] アンケート概況
大学 A：2020 年 7 月実施、回答者数 4376 名（回答率 34%）
大学 B：2020 年 8 月実施、回答者数 15093 名（回収率 31.4%）
大学 C：2020 年 7 月実施、回答者数 3521 名
大学 D：2020 年 12 月～1 月実施、回答者数 8556 名（回答率 30.2%）

図 1　オンライン授業の利点[2] [3]

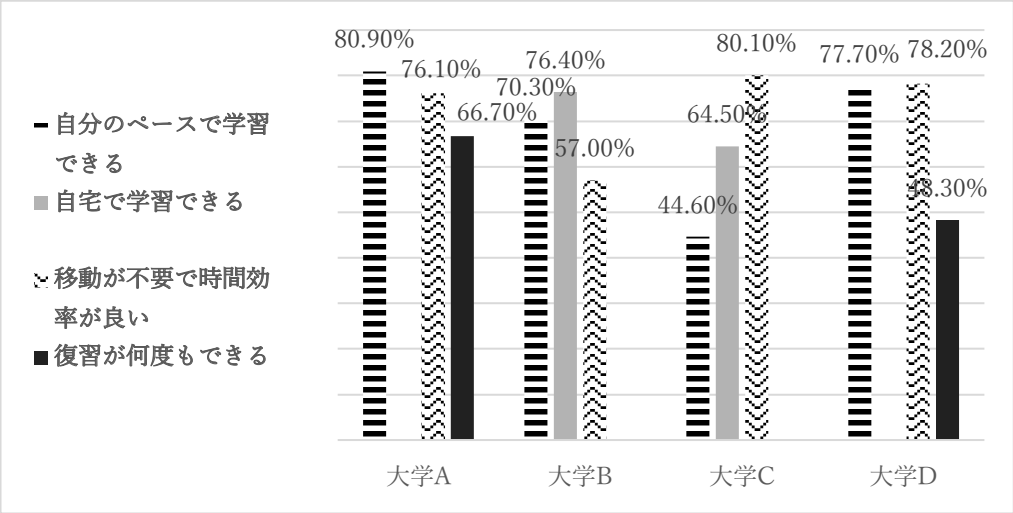
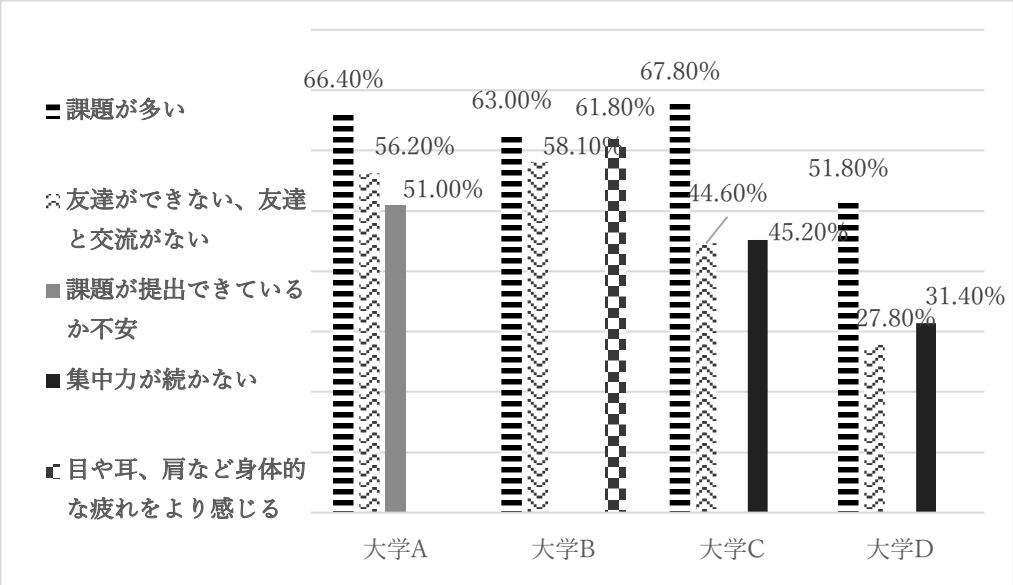


図 2　オンライン授業の改善点



[2] 個別の結果やその比較は目的としていないため、本稿では大学名を便宜上大学 A、B、C、D と記載している。調査結果の概要は、参考ホームページに記載している各大学のサイトを参照されたい。

[3] 各大学の回答者の総数に対する割合、上位 3 項目。

まず、利点については 4 つに集約されており、無作為に選択した 4 つの大学での調査結果がこのような一致を見せたという点では、この結果が学生間に一定の傾向を示しているといえる。4 つの項目のうち、「自宅で学習できる」には様々な意図が含まれることが考えられる。「自宅で学習できる」ことには、例えば「移動が不要」であることや、「学習において自分のペースを保てる」ことも含まれ、他にも集中力や教員の目など、幅広い意図が想定される。この項目は大学 A と D で実施されたアンケートでは選択肢となっておらず、いずれも「自分のペースで学習できる」「移動が不要で時間効率が良い」の 2 項目が選ばれていることを踏まえると、大学 A と D の調査でこの項目があれば、大学 B や C と同様に上位に位置することが予想され得る。逆に、この項目がある大学 B と C の調査では、「復習が何度でもできる」ことが大学 B では 48.4%で 4 位、大学 C では 20.9%で 5 位となっており、この項目が選択肢になければ、大学 A、D と同様に上位に入る可能性もある。「自分のペースで学習できる」ことと「復習が何度でもできる」ことは、オンデマンド型授業の利点である。オンデマンド型授業の場合、受講の時間と空間は基本的には自由である。「自分のペースで学習できる」「移動が不要で時間効率が良い」の 2 項目が 4 大学に共通し、さらに「復習が何度でもできる」が入るという点は、学生がオンライン授業に対し、時間効率性と自身の学習習慣への適合をその利点として捉えていることを示している。

また、上記の 4 項目は、いずれも自学自習を前提としている。対面授業では同じ時空間に教員と他の学生が存在しているが、オンライン授業、特にオンデマンド授業では時間と物理的空間の共有が行われないため、その存在の実感は薄くなると考えられる。これらの 4 項目以外にも、教材および授業内容理解のしやすさや学習時間の長さによる疲労の軽減に関する項目などが選択肢として挙げられているが、これらの 4 項目はそれよりも優先的に選択されている。この 4 項目は、教員と他の学生という、授業を構成する共同体との直接的な接触を必要としないという点で共通しており、授業空間を構成する「共同体」としての教員と他の学生の存在を意識しづらいオンライン授業については、学生は「共同体」との直接的な関わりがなくても問題がないような項目を利点として認識していると考えられる。

改善点は 5 項目に集約されている。4 大学で共通の 1 位となっている「課題が多い」ことは、定期試験の不実施を主な方針とした大学が多く、その代替として授業内の課題評価が成績評価方法の中心とされたことによるものである。「友達ができない、友達と交流がない」は、先にオンライン授業の利点において述べたとおり、授業内の「共同体」の要素の不足という点がそのまま反映されている。

したがって「共同体」の存在実感が薄いことが影響しないような項目が利点として、「共同体」の存在の認識が前提となる項目が改善点として選択されているといえる。「集中力が続かない」は、教員の直接的な監督下になく、物理的に学習に無関係なものが周囲に存在するという環境での学習を余儀なくされることにその理由があると考えられる。これは、「自宅で学習できる」ことの否定的側面である。緊張感や連帯感といった「共同体」から与えられる影響が極端に少ない環境下での学習に慣れていない学生は、学習しづらいと感じるであろう。また、次点として「教員に質問がしにくい」「教員の指示が分かりづらい」という項目が、3 大学で 20～40%の割合を占めている。このことも、「共同体」としての教員が物理的空間に存在していないことで、情報が不足していると学生が認識していることを示している。教員や他の学生と物理的に接触していない空間で学習することによって、その存在の実感が薄くなることが、学生の学習意欲に肯定的に働く場合と否定的に働く場合がある。学生は、授業環境を構成する「共同体」が存在することを実感しづらいオンライン授業について、「共同体」との関係性がほぼないということを前提とするため、個人の学習習慣に適合しているかどうかという点をその判断の基準とする。それゆえに、「自宅で学習する」ことの肯定的側面と否定的側面のそれぞれが、利点と改善点のそれぞれに現れるという結果になったと考えられる。

また、オンライン授業の利点がオンデマンド授業の利点に偏っていることは、リアルタイム授業やハイブリッド授業の有益性を学生が感じていないということを示している。オンデマンド授業に比べれば、「共同体」が同じ物理的空間に存在していなくても時間を共有しているという点で、リアルタイム授業やハイブリッド授業での共同体の存在の実感は大きくなるであろう。オンライン授業の改善点に見られた「共同体」からの影響の不足は、利点と同様、オンデマンド授業を前提とした回答に偏った結果であると考えられる。学生は、オンライン授業＝オンデマンド授業と意識しており、リアルタイム授業やハイブリッド授業については、対面授業との違いを意識していない可能性がある。

表 1 は対面授業の利点と改善点についての調査結果である。授業内での「共同体」の存在実感の影響は、この結果にも現れている。[4]

[4] 2020 年度後期から対面授業を再開した大学 D では、対面授業とオンライン授業を比較する形式でアンケートを実施している。

表 1　対面授業の利点と改善点

対面授業の利点		
1 位	2 位	3 位
他の受講生と交流しやすい 58.8%	孤独感が少ない 32.6%	先生からの指示が受けやすい　31.7%
対面授業の欠点		
1 位	2 位	3 位
一方的に講義されることが多い 40.0%	私語がある 27.1%	あてはまるものがない 21.7%

利点の 3 項目は、いずれも「共同体」の存在を前提としており、学生が「共同体」の存在を重視していることを示している。一方、改善点で最も割合の高い「一方的に講義されることが多い」について、「一方的に講義される」授業であるかどうかは、その授業の形態に左右される。大教室での講義形式で受講する場合、少人数形態の授業よりも、「共同体」との共同活動は不足しやすい。受動的で一方向的な授業を学生が好まないということ自体は、オンライン授業導入以前から、講義形式の授業において存在しており、それゆえに、アクティブ・ラーニングや PBL (Project Based Learning) のような授業形式が近年増えてきているのである。もともと存在していた学生による一方向的な授業の敬遠が、この結果に顕在化したといえる。

多数の受講者がいる講義形式の授業の場合、対面形式ではなくオンライン形式での受講を好む傾向は、同じく大学 D での受講形態別の受講のしやすさについての結果 (表 2) に如実に表れている。

表 2　受講しやすいと思う受講形態

	対面	リアルタイム	オンデマンド	ハイブリッド
講義 251 名以上	7.6%	6.0%	82.1%	5.0%
講義 151 名～250 名	7.7%	6.5%	81.3%	4.6%
講義 50 名～150 名	15.9%	9.1%	66.9%	8.2%
講義 50 名未満	35.7%	13.9%	41.1%	9.3%
演習	49.4%	10.2%	31.8%	8.6%
外国語	34.2%	20.6%	37.2%	8.0%
実験実習	66.7%	5.6%	20.1%	7.6%

実技	70.1%	4.7%	18.5%	6.7%
ゼミ・卒業研究等	61.4%	9.6%	16.0%	12.9%

受講者数が多い授業ほどオンデマンド授業をより強く好む傾向が表 2 にははっきりと表れている。感染の危険性の回避の他に、「共同体」との活動が少ない傾向がある大教室の講義では、対面であっても他の学生との交流機会は減少する。オンデマンド授業であれば、学生はそもそも「共同体」との交流を前提とせず、「共同体」との活動が少ないことを気にする必要がないのであろう。一方で、実験実習・実技・ゼミのように、物理的空間において「共同体」との共同で活動することが中心となる授業では、対面授業での受講が好まれる。オンデマンド授業よりは「共同体」の影響が大きいであろうリアルタイム授業・ハイブリッド授業について、講義形式では対面授業と同様に割合が低いことも、「共同体」の存在意義が大人数の講義では低いと学生が捉えていることを示している。

また、リアルタイム授業がどの授業でも比較的低い割合を示している中で、外国語の授業については 20%以上の数値を示しており、他のリアルタイム授業の割合よりもやや高い。リアルタイム授業では、オンライン上の時空間を「共同体」と共有するため、対面授業に近い授業活動が可能となる。学生は、語学の授業では「共同体」の存在及び共同活動がより必要であると認識していることがうかがえる。表 1 の結果を踏まえれば、「一方的に講義される」ことが少ない授業は対面で、「一方的に講義される」ことが多い授業は、他の学生との共同活動がそもそも少なく、オンデマンド形式での受講を好む傾向が表れていると考えられる。

授業内容によって好まれる授業方法が異なることに加え、好みだけではなく学習効果にも、授業と授業方法の適合性が関係しているという認識が学生にはあるようである。表 3 は、対面授業とオンライン授業の学習効果についての調査結果である。

表 3　対面授業とオンライン授業の学習効果 (学習環境とのクロス集計)[5]

学習環境	対面の方が非常に高い	対面の方が高い	同じくらい	オンラインの方が高い	オンラインの方が非常に高い	授業による
問題はない	18.49%	26.78%	19.48%	8.30%	5.77%	21.19%

[5] 大学 C では、別途通信環境や生活騒音といったオンライン授業の学習環境の問題について、5 件法での調査を行っている。

ほとんどない	21.36%	34.79%	13.43%	5.45%	1.84%	23.13%
少しある	34.29%	30.86%	8.92%	4.12%	1.10%	20.71%
大いにある	71.43%	10.48%	0.95%	1.90%	0.95%	14.29%
総計	24.62%	30.73%	14.03%	5.96%	2.90%	21.76%

オンライン授業の受講環境が悪いほど対面授業の学習効果が高いという認識が現れてはいるが、対面授業に対する肯定的回答[6] は、オンライン授業の受講環境に問題がない学生でも計 45.27%であるのに対し、オンライン授業に対する肯定的回答の割合の合計は 14.07%と大きな差がある。総計では、肯定的回答の合計で比較すると、対面授業が約 56%、オンライン授業が 10%を下回り、その差は大きくなっている。また、「授業による」が総計で 20%を越えていることは、講義やゼミなど様々な授業に対し、適した授業方法は異なるという認識が現れたものである。「共同体」から得られる情報量は、同じ時空間に「共同体」が存在している対面授業が最も多く、そのことが学習の実感につながりやすいため、全体的に対面授業の数値が高いと考えられる。

以上のとおり、大学のオンライン授業に関するアンケート結果から、学生が、授業を構成する「共同体」から受ける影響を基準として授業を捉え、オンデマンド授業における時間効率性と学習利便性を重視し、受講形態に応じた授業方法があると認識している傾向が明らかになった。次節では、講義、ゼミ、語学などの授業形態を統一した上で、オンライン授業の授業実施方法を区別して調査した独自アンケートの結果について考察する。

2.2 ドイツ語授業独自アンケート

2.1 で扱った大学実施のアンケートの結果を踏まえ、受講形態に応じた授業方法について論じるためには、授業形式の統一と授業方法の詳細な区別を行ったうえでの調査が必要である。そこで執筆者は、担当する初修外国語としてのドイツ語授業の受講者を対象として、独自アンケートを実施した。同じ外国語授業でも、文法項目の説明を中心とした講義形式であるか、会話練習を中心とした授業であるか、さらには教科書や教員によって、その授業の運営方法は異なる。対面授業とオンライン授業という形式に、学生が感じる満足度や学習効果の面で違いがあるかは、このような条件を統一し、かつ授業外の要素をできる限り排除して調査

[6] 「肯定的回答」は対面、オンラインのそれぞれの「非常に高い」「高い」の割合を合計したものである。

する必要があろう。

実施したアンケートの概況は以下のとおりである。

実施時期：2021 年 1 月
実施対象：2020 年度に担当した授業のうち、通年で 1 冊の教科書を使用し、かつ前期・後期で異なった授業方法で実施した授業の受講生
対象クラス：
①前期：オンデマンド (動画) 後期：リアルタイム（Teams）【回答数 9 人】
②前期：資料提示 後期：対面 【回答数 2 人】
③前期：リアルタイム (Zoom) 後期：対面 【回答数 5 人】(今年度追加 3 人) [7]

時間と場所、通信環境面の制約の有無、感染リスクへの不安、授業時間外の行動（友人との交流・大学施設の利用等）を授業外の要素として排除した上で、教員および扱う授業内容を統一することで、授業の質が授業の実施方法に左右されるかどうかという点が明らかになると考えられる。併せて、この結果を通して、ケーススタディとして、外国語、ひいてはドイツ語の授業にはどのような実施方法が適しているのか、学生にとって有益であるのかということについて検討する。

質問項目は以下のとおりである。満足度・理解度・意欲について、4 項目選択式での回答と、自由記述形式での選択理由の回答を依頼した。

【質問項目】 (一部抜粋)[8]
(1) 前期の授業（A）と後期の授業（B）について、授業の満足度はどちらが上ですか？
＊移動不要による時間効率、（授業時間外で）友達と遊べる、通信環境・PC の不具合などは考慮せず、授業内容に関してお答えください。
(3) 前期の授業（A）と後期の授業（B）について、どちらの方が理解できたと感じますか？

[7] 2020 年度回答者 5 名に加え、2021 年度前期に同授業を教科書、授業形態共に 2020 年度と同様に実施、緊急事態宣言期間中はリアルタイムで、期間外は対面で実施した。通年で前期・後期と授業方法を違えて実施した 2020 年度の受講生と同様に調査対象となる要件を満たしたため、2020 度 7 月末の段階で追加調査を行い、新たに 3 件の回答を追加した。
[8] (1)・(3)・(5) は満足度、理解度、意欲についての質問であり、(2)・(4)・(6) はそれぞれ直前の質問の回答理由についての自由記述形式での回答である。

＊文法項目そのものの難易度は考慮しないでください。

(5) 前期の授業（A）と後期の授業（B）について、どちらの授業が「がんばろう」という気になりましたか？

＊移動不要による時間効率、(授業時間外で) 友達と遊べる、通信環境・PC の不具合等は考慮せず、授業内容に関して答えてください。

(7) それぞれの授業形態について、通学（ 時間効率 ） 面・通信環境面・授業外での友人関係等以外で、感じている長所・短所があれば、書いてください。

(8) 今後、コロナ禍の不安が仮になくなり、同じようなドイツ語の授業を受ける場合、どちらの形式で受講したいですか？ 【A／B 二択】

【選択肢内容】

(1) 前期 (A) の方が満足した・後期 (B) の方が満足した・どちらも同じくらい満足した・どちらも同じくらい満足しなかった

(3) 前期 (A) の方が理解できた・後期 (B) の方が理解できた・どちらも同じくらい理解できた・どちらもあまり理解できなかった

(5) 前期 (A) の方が意欲がわいた・後期 (B) の方が意欲がわいた・どちらも同じくらい意欲がわいた・どちらも意欲がわかなかった

上記の形式を用いて調査した結果は次のとおりである。表 4 はクラス①の調査結果である。

表 4 クラス① (オンデマンド (動画) ー リアルタイム)

	オンデマンド	リアルタイム	どちらも〇	どちらも×
(1) 満足度	1	5	3	0
(3) 理解度	1	7	1	0
(5) 意欲	0	6	3	0

3 つの項目のいずれについても、動画オンデマンド授業の方がリアルタイムより上回るという回答は非常に少ない。満足度と意欲については、回答が重なる傾向があった。(1) 満足度と (3) 意欲の両方で「リアルタイム」を選択した学生が 5 名、「どちらも同じくらい満足した／意欲がわいた」を選択した学生が 2 名である。それぞれの選択理由は次のとおりである。

【満足度と意欲での「リアルタイム」選択理由】
〔満足度〕　緊張感がある、直接解説を聴くことができる
〔意欲〕　他の人と一緒に学べる、直接聴くことで理解が深まると思った、
　　教員がいるのでしっかり課題に取り組めた
【満足度と意欲での「どちらも同じくらい満足した／意欲がわいた」選択理由】
〔満足度〕　学習内容に応じた適切性
〔意欲〕　特になし、無回答、どちらでもやる気はある

満足度と意欲の両方に「リアルタイム」と回答した学生が挙げた理由は、いずれも、教員または他の学生という「共同体」が同じ時間に存在し、それを意識することにより感じられる利点をその理由として挙げている。オンデマンド授業では教員の存在感が希薄になるため、緊張感や取り組み姿勢に影響する。また、オンデマンド授業では動画視聴型での授業を実施したにも関わらず、教員の話を直接聴くということをメリットとして捉えているというのは、教員が自分と同じ時間に存在していることを実感する必要性を学生が感じていることを示している。一方、満足度と意欲の両方に「どちらも同じくらい満足した／意欲がわいた」とした学生の満足度の主な選択理由は、授業で学習する内容によって異なるというものであった。前期は、文法の初歩項目について、復習が容易なオンデマンド授業であることで理解を深めることができ、後期には、それを土台として問題の解説や疑問点の確認などがその場で行うことができた、というものであった。満足度で「どちらも同じくらい満足した」を選択した 3 名のうち、1 名だけは (5) 意欲で「リアルタイム」を選択している。その理由は、オンデマンドでは見るだけになり、リアルタイムの方が集中できる、というものであり、これは先の満足度・意欲の両方に「リアルタイム」を選択した学生と同じく、「共同体」の存在の実感の必要性を示すものである。学習内容の難易度がさほど高くない場合、基礎文法等についてはオンデマンドの反復学習の可能性もメリットとして捉えられ得る。その一方で、リアルタイム授業において「共同体」が同じ時間内に存在することについては、緊張感や安心感など、「共同体」の存在を実感するという場合と、直接聞くことで「共同体」からの情報の量ないし質が違うと認識するという 2 つの異なった側面がメリットとして捉えられていることが、このわずかな対象数の調査からでも見えてくる。

一方で、(3) の理解度については、リアルタイムに一定の偏りが見られ、その選択理由は、間違いをその場で直せる、他の人が間違ったところの解説も聞けて理解が深まるなど、即時応答性と付加情報の多さに関するものであった。まさに「共

同体」である教員と他の学生が同じ時間に存在している場合にしか得られないものであり、上に述べた、「共同体」からの情報の量ないし質についてのメリットを重視したものであると考えられる。オンデマンドを選択した 1 名の理由は、リアルタイムだと解くのが遅くなった時についていけなくなる、というものであり、オンデマンドの反復学習の可能性の裏返しの結果である。

このように、リアルタイム授業においては、「共同体」が同じ時間内に存在していることで与えられる心的効果が学習姿勢に影響し、また同じ時間内に存在することで与えられる情報の質がことなると学生は認識している。情報量の多さと即時性により、理解度の実感としてはリアルタイムの方が高くなるが、オンデマンドの反復可能性は、学習内容によってはその有効性を発揮し得る。その他、時間効率面の条件を排除したにも関わらず、満足度についてオンデマンドを選択した学生の選択理由が時間効率性であることは、大学アンケートの結果同様、オンデマンド特有の時間の有効活用性を学生が非常に有益に感じていることを示している。

次に、クラス②については、(1)・(3)・(5) のすべての質問で 2 名の回答が完全に一致した。満足度と理解度は共に対面、意欲は「どちらも同じくらい意欲がわいた」となった。

【満足度と理解度での「対面」の選択理由】
〔満足度〕　随時質問できる、重要な語彙や表現が分かりやすい
〔理解度〕　文章の説明よりも直接聞く方が分かりやすい
【意欲での「どちらも同じくらい意欲がわいた」の選択理由】
　学習内容に大きな違いがなく、授業方法で違いは感じなかった

資料提示型がその他のオンライン授業や対面授業と異なるのは音声による説明がないことであり、この点が理解度に及ぼす影響は大きいようである。文字による説明と口頭での説明を比較すると、その情報量を一致させるためには、文字資料では膨大な量となる。そのために記載する情報を必要最小限にし、結果として情報量が不足しやすくなる。情報の即時性が満足度、理解度に影響している点は、クラス①についての調査結果と同様である。意欲については、授業方法には左右されないと感じる学生も一定数いるようである。このことは、クラス①でも「どちらも同じくらい意欲がわいた」の選択理由にも表れている。また、クラス②は、2 年次以上の、すでに基礎文法を習得した学生の選択科目であり、その内容は自由作文や新聞記事の講読等であった。そこに、質問の即時応答性などを重視した

ことの要因があるとも考えられる。学習内容が複雑になるほど、学生は教員とのコミュニケーションを必要とし、それゆえに学習内容に応じた授業形式の選択の必要性が、この結果に表れていると言える。

表 5　クラス③　（ リアルタイム － 対面 ）

	リアルタイム	対面	どちらも〇	どちらも×
(1) 満足度	1	2	5	0
(3) 理解度	2	4	2	0
(4) 意欲	2	4	2	0

表 6　学生別回答

	学生 A	B	C	D	E	F	G	H
(1) 満足度	同じ	対面	同じ	同じ	リアル	同じ	同じ	対面
(3) 理解度	リアル	対面	同じ	対面	リアル	対面	同じ	対面
(5) 意欲	リアル	対面	対面	対面	リアル	同じ	同じ	対面

表 5 及び表 6 は授業③についての調査結果である。表 5 の結果のみを見ると、理解度と意欲についてやや対面、満足度については「どちらも満足した」の傾向があるものの、回答にはかなりばらつきが見られる。表 6 は学生別の回答の一覧である。学生 B、学生 E、学生 H は満足度・理解度・意欲のすべての回答が対面またはリアルタイムに偏っている。その他、学生 A と D は満足度が同じで、理解度と意欲についてはそれぞれリアルタイムと対面に偏っている。

【「対面」の選択理由（B、H、D（理解度・意欲のみ）、C（意欲のみ））】
　質問の即時応答性、教員・他の学生とのコミュニケーションの機会の多さ
【「リアルタイム」の選択理由（学生 E、学生 A（理解度・意欲のみ））】
　集中できて授業後の疲労感がすくない、先生に注視されているように感じる

教員の存在を実感することで緊張感があると言う点でリアルタイムの方が集中できるという回答は、クラス①の学生にも見られた意見である。「共同体」の存在の実感という点では、リアルタイムは、授業に参加している他の学生よりも、教員の存在をより強く実感するようである。さらに、学生 C が満足度で同じとした理由は、リアルタイムでは集中できて対面では質問しやすいので利点が同じである、

としている。また、理解度と意欲でリアルタイムと答えた学生 A と E は、(8)の今後同様の授業を受けるならばどちらの形式が良いかという質問に対してもリアルタイムを選択し、さらに学生 C も意欲では対面と解答しながら、この質問ではリアルタイムを選択している。3 名共にその理由を通学時間による疲労としており、オンライン授業による時間効率の利点を学生が重視していることがこの結果にも示されている。

独自アンケート結果からは、次のことが見えてくる。オンデマンド授業では、「共同体」の影響が非常に少ないため、理解度や学習意欲の実感は低くなる傾向にあるが、学生個人の学習習慣と授業内容により、オンデマンド授業の反復学習の可能性と時間効率性を有益であると感じる学生も少なくない。リアルタイム授業では、教員の存在実感が意欲や理解度に影響するようであるが、対面授業では他の学生の存在が同様に実感される。学習意欲に関しては、「共同体」の存在実感の他に、学習内容によって決まると感じる学生もおり、個人の学習姿勢に拠るところが大きい。「共同体」の影響として挙げられるものは、(1) 教員とのコミュニケーションの即時性、(2) 教員の存在実感による心的効果、(3) 他の学生とのコミュニケーションの多さにまとめられる。リアルタイム授業では (1) と (2) が、対面授業では (1) と (3) が大きく影響し、特に (1) については対面授業の方がより利点として捉えられやすくなることが、満足度や理解度に影響するといえる。しかし、(2) と (3) に関して、学生自身がどちらを有益であると感じるかは、学生個人の学習習慣の影響を受けざるを得ない。

以上、前節及び本節において、学生へのアンケート調査をもとに、特に授業内での「共同体」の影響を主軸において考察を行った。次節では、授業においての教員と他の学生の影響とは具体的にどのようなものであるのかということについて、「共同体」とのコミュニケーションという観点で考察結果にさらに検討を重ねていく。

3. 授業内コミュニケーション

「共同体」から受ける影響というのは具体的にいったいどのようなものであるのか。共同体からの影響、ないし共同体からの情報が不足するというのは、すなわち共同体とのコミュニケーションが不足している、ということが考えられる。杉谷 (2007) は、対面コミュニケーションにおいて意図が相手に十分伝わると言うのは幻想であるとしている (2007: p.159)。杉谷 (2007) は、受け手が送り手メッセージをその意図通りに理解し、その情報を両者が共有している程度を伝達度、メッセージが伝わったことに関する送り手の主観的な感覚を伝達感として定義し

た上で、この伝達度・伝達感と、表情、ジェスチャー、声の調子などの、非言語的手がかりの関わりついて、様々な実験を通して調査を行っている。結果として、非言語的手がかりは情報の伝達度を高めているとは言えず、また非言語的手がかりが多い時に、メッセージの送り手側の伝達感が高まるという結果が得られており、対面的なコミュニケーションにおいて、伝達感が高く評価される、としている。視覚的手がかりの有無を区別した調査の結果では、視覚的手掛かりがある条件では、ない条件よりも伝達感が高くなったとしている。その他の実験結果も含めて、杉谷 (2007) は、「伝達度」には、非言語的手がかりはそれほど重要な影響は及ぼさず、むしろ非言語的手がかりによって正確な情報伝達が阻害されることがあるとし、それにもかかわらず、対面や電話といった非言語的手がかりが多いメディアにおいて、非言語的手掛かりの少ないチャットやメールのようなメディアよりも、伝達感が高く評価される、と述べている。すなわち、伝達感を得られるかどうかは視覚的手掛かりの有無によって規定されるということである。視覚的手掛かりがあれば、人は「自分の発した情報が相手に伝わった」あるいは「相手の発した情報が伝わってきた」と感じ、逆に視覚的手掛かりがないと「伝わった」という感覚を持つことができない、ということになる。教員と学生のコミュニケーションという点で見ると、例えばオンライン授業の欠点として挙げられていた、質問がしにくい、指示が分かりづらいということに対して、メールやチャットなどでの対応を行っていた教員は少なくないと思われる。それにもかかわらず、アンケート結果では教員からの情報が不足していると感じた学生が一定数いた。オンデマンド授業のような非対面コミュニケーションでは、メールやチャットを通しての情報伝達では、伝達感を持ちにくく、結果として学生にはコミュニケーションが不足していると感じられたことが考えられる。また、「直接聞くのがわかりやすい」という意見も、視覚的手掛かりによる伝達感の高い評価によるものと考えることができよう。実際に情報が伝達できているかどうかとは別に、感覚的に認識されているものではないか、ということになるのである。

それでは、オンライン授業においてのコミュニケーション、「共同体」からの影響というのは、学生にあるいは教員に、「不足している」と感じられているだけで、実際には不足していない、ということになるのであろうか。マレービアン (1986) は、話し手が聞き手に与える情報の影響力の割合が、言語情報 7%：視覚情報 55%：聴覚情報 38% であるとしている。授業内での教員と学生、学生と学生のコミュニケーションにおいて、対面授業の中で知覚される情報というのは非常に多くなる。対面授業においては、受講している学生の周囲には、他の学生が存在し、周囲にいる他の学生の表情、受講態度、筆記音や私語も含め、意図せず視覚情報、聴覚

情報として知覚する。加えて、学生間の共同活動を授業内で行う際には、その活動内でも同様の情報の知覚が行われる。他のペアやグループの会話内容や、教員に対する行動とそれに対する教員の反応行動も、意図せず知覚する。他の学生の質問とそれに対する応答も耳に入る。課題に取り組む速度なども、他の学生から発せられる物音や声、態度などである程度推測が可能である。このように、付加的な情報による他者との比較が可能な環境は、物理的に「共同体」が同じ空間に存在していることで作り出されるものである。マレービアン (1986) が示しているような、非言語的情報の重要性は、メッセージの正確な伝達について非言語的手がかりの影響はそれほど大きくないとした杉谷 (2007) とは論を異にするものではあるが、単純なメッセージの伝達と理解の過程だけではなく、教員と学生、学生と学生のコミュニケーションの複合と、それによって生み出された付加的情報を含む授業という枠組みでコミュニケーションを捉えた場合に、対面授業での知覚情報の多さは、否定できるものではないであろう。対面授業内で共同体から得られる情報量の差が、感覚的に「わかりにくい」という印象を学生が持ってしまう可能性がある。これに加えて、杉谷 (2007) が言うように、視覚的手掛かりの有無による伝達感がオンライン授業ないしオンデマンド授業では得られにくいとなると、学生の理解度ないし満足度がより低く評価されることには、何ら不思議はない。

4. 授業実施方法と学習効果

学生アンケートでは、満足度、理解度、学習意欲という、学生が感じる授業の質について考察した。学生にとって質の良い授業が、満足できて分かりやすく頑張ろうと思える授業であるとすれば、教員にとって質の良い授業とは、学生が授業内容を正しく理解できる授業である。学生が感じる理解度ではなく、自身が行う授業に学習効果があるかどうかということが中心的になる。オンライン授業の学習効果については、コロナ禍以前に、いくつかの機関において実験と調査が行われており、その結果が公表されている。いずれも基本的には、学習者をオンラインで学習するグループと対面で学習するグループに分け、一定期間の学習後にテストを実施するという方法で調査を行っている。コロンビア大学の調査 (Jaggars and Baily 2010) では、オンライン学習の方が、対面学習よりも学習効果があるという結果となった一方で、ロシアの HSE University での調査 (Chirkov et al. 2020) では、オンラインで学習した学生の方がテストの平均点はやや高いものの、学生の満足度は、対面で学習した学生よりもやや低い、という結果が出ている。アメリカのコーネル大学では、オンラインのみで授業を行ったグループ、対

面のみで授業を行ったグループ、オンラインと対面の混合方式で授業を行ったグループと、3つのグループを比較し、テストの成績については3つのグループにほぼ差がないが、満足度については、オンライン授業のグループがやや低いという結果が出ている (Lefkowitz 2020)。すなわち、学習効果に関しては、学生の満足度とは無関係に、オンライン授業は対面授業と同等またはやや高いという結果が出ているのである。学習効果にほとんど差がないのであれば、学生が授業内容を正しく理解できる授業を実施することを目標とする教員にとっては、授業内容に合致しているかどうかという観点で、授業方法の選択を行えばよいという結論が導かれる。オンデマンドやリアルタイムといった授業方法別の学習効果については、上記の調査と同様の手法で調査を行う必要があるが、一定数の受講者と環境が必要となるため、今後環境を整備した上で調査を行いたいと考える。

5. おわりに

「共同体」の影響を考慮に入れて、学生が感じる「授業の質」をより高める形で、授業内容に応じてどの授業方法を選択するかという点について、以上の考察結果をもとに、本節で一例として次のような授業実施方法を提案したい。例えば、一般的な大学の 1 年生向けの第二外国語の入門クラスでは、1 クラスの受講者数は 20 人から 40 人程度と比較的多くなる。受講者数が多くなるほど、対面授業では教員の存在の実感が低くなる傾向にある。従って、リアルタイムでの授業実施を基本として教員の存在実感を高めながら、オンデマンド授業による反復可能性を生かし、基礎的な学習事項をまとめた動画を定期的に配信して理解度を高める、というような形式が考えられる。作文や応用文法項目を扱うような、より複雑な内容を扱う授業では、受講者数もより少なくなることが想定され、教員から得られる情報および質疑応答の即時性の必要性が高くなるため、対面授業で実施する、という形が考えられる。また、学生間の共同活動に重点を置いた受講者数の少ないクラスの場合は、他の学生とのコミュニケーションが重要視されるため、基本的に対面授業で実施し、その都度の授業内容によって共同作業の必要性が低い授業回には、集中力をもった学習姿勢を保つ機会としてリアルタイムを活用するというような形式が考えられる。実際には、クラスの雰囲気や、授業進度、習熟度などに応じて、授業方法を変更する必要性が生じることも考えられる。授業実施方法を決定するのに、共同体とのコミュニケーションという観点を取り入れることで、どのような授業の構築が可能になるかという一例としてここに提案するものである。

参考文献

杉谷陽子. 2007.「電子メディアによる情報伝達の研究－コミュニケーションにおける非言語的てがかりの役割－」一橋大学 博士論文.

マレービアン・アルバート (西田司他共訳). 1986.『非言語コミュニケーション』東京: 聖文社.

山内祐平. 2020.『学習環境のイノベーション』東京: 東京大学出版会.

Chirikov, Igor, Semenova, Tatiana, Maloshonok, Natalia, Bettinger, Eric and Kizilcec, René F. 2020. Online Education Platforms Scale College STEM Instruction with Equivalent Learning Outcomes at Lower Cost. HSE University. https://publications.hse.ru/mirror/pubs/share/direct/356577541.pdf

Jaggars, Shanna Smith and Bailey, Thomas. 2010. Effectiveness of Fully Online Courses for College Students: Response to a Department of Education Meta-Analysis. Community College Research Center. https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED512274.pdf

Lefkowitz, Melanie. 2020. STEM Students Learn as well Online as in Classrooms. Cormell University. https://news.cornell.edu/stories/2020/04/stem-students-learn-well-online-classrooms

参考ホームページ

岡山大学高等教育開発センター. 2020.「オンライン授業に関するアンケートについて」 https://www.iess.ccsv.okayama-u.ac.jp/hedi/kakusyusiryo/survey_onlineclasses/（2021 年 2 月 15 日アクセス）

関西大学. 2020.「対面授業に関する学生アンケート（ダイジェスト版）」 https://www.kansai-u.ac.jp/ir/taimen_survey_2020au_digest.pdf（2021 年 3 月 1 日アクセス）

名古屋大学メディア情報データ科学センター. 2020.「オンライン授業に関する学生アンケート調査結果」 https://www.nufs.ac.jp/media/20200919-01-001.pdf（2021 年 2 月 25 日アクセス）

早稲田大学. 2020.「オンライン授業に関する調査結果」 https://www.waseda.jp/top/news/70555（2021 年 2 月 15 日アクセス）

The function of companions in online and in-person classes

Nami Komoda

The aim of this paper is to consider how teaching methods should be selected to provide online or in-person classes that are satisfactory for students. Especially, this paper focuses on the role of the “companions” in an online classroom, which include classmates as well as teachers. In classes taking place under various online teaching methods, the companions can have various effects on learning motivation, the sense of satisfaction and so on. This paper examines the results of the questionnaires that were conducted at elementary classes of German in different universities, and explores possibilities of online classes, and proposes a new teaching style of foreign languages that take advantages of in-person and online classes.